愛知の博物館　No.95

岩田洗心館

財団の寄付設立者である岩田錦平は、自ら蒐集した書画茶道具及び岩田家伝来の諸道具類の一括保存ならびに公開を図り、美術館の創設を計画したが、その途中で急逝した。そのため、嗣子忠夫夫妻がその志を継ぎ、昭和45年11月に財団法人岩田洗心館を完成、開館した。平成19年、犬山市庁舎の移転新設事業に伴い旧館を解体。平成23年4月、旧所在地の北側に新館を移転開館した。所蔵品は、書・画・茶道具・犬山焼・その他陶磁器類等、約1800点余りを数えるが、その内容は大別して、犬山城下の富裕な商家であった岩田家の家財道具中美的価値があると思慮されたもの、同家歴代の蒐集にかかる書画・茶道具類、初代館長岩田正人の蒐集にかかる近世詩書画、となる。岩田家の記念館というおもむきがつよいが、文化文政頃から明治にかけて隆盛を誇った白帝城下の町人文化の一端を窺わせる資料群を残した現在唯一の施設でもある。

目　　次

●平成23年度職員研修会の報告 …… 2
●第36回 東海三県博物館協会研究交流会 …… 3
●平成23年度第2回理事会の報告 …… 4
●平成23年度部門別研修会の報告
　教育・普及部門研修会 …… 4
　保存・修復部門研修会 …… 6
　調査・研究部門研修会 …… 7
●表紙館のご紹介 …… 8

平成23年度
愛知県博物館等職員研修会の報告

平成23年度愛知県博物館等職員研修会は、「―想定東海東南海地震に備える―被災館と被災地域にある博物館」をテーマに、平成23年10月19日(水)、名古屋市科学館において開催された。なお、今回の研修会は、当協会と愛知県教育委員会との共催であり、また同じく「想定東海東南海地震」をテーマにした静岡県博物館協会との連続研修会として実施。さらに同日午前中に開催された「第36回東海三県博物館協会研究交流会」の出席者の参加も可能とした。総出席者は107名で、そのうち当協会からは78名が参加した。

本年3月11日に起きた東日本大震災によって、博物館施設やその収蔵品のみならず、その地域の文化財や歴史資料などに大きな被害がもたらされ、その後文化庁が「文化財レスキュー」を立ち上げると、様々な組織が連携をとりレスキュー活動に取り組んだ。しかしその活動の要はやはり被災地域である教育委員会と博物館組織が担っていた。この東日本大震災後の経験は、東海東南海地震が想定される地域の各博物館が県内の博物館や教育委員会と情報を共有しながら活動し、さらに県外の関係組織とも連携を組むことがいかに重要であるかを教えてくれた。

本研修会では、東日本大震災で被災した館や被災地域にある博物館の現状や問題を学び、今後当協会内で整備される予定の「災害時の協力体制」について考える第一歩とすることを目指し、下記のとおり講演を実施した。

講演①「東日本大震災が起きてからのこと―心の動揺と葛藤」
講師：田中善明氏
（三重県立美術館学芸普及課長）

講演②「現地からの報告―東日本大震災の文化財レスキュー事業―」
講師：山崎健氏
（奈良文化財研究所研究員）

（写真）救援委員会本部事務局・東京文化財研究所保存修復科学センター副センター長　岡田健氏

講演③「被災文化財等救援委員会による文化財レスキュー」
講師：岡田健氏
（救援委員会事務局・東京文化財研究所保存修復科学センター副センター長）

三重県立美術館の田中善明氏は、日本では今なお数少ない保存担当の学芸員であり、東日本大震災が発生した直後から、保存担当学芸員の立場で様々に労を尽くされた。講演のなかで、東日本大震災発生直後は、一人の保存担当として、そしてまた組織の中の学芸員として、できることとできないことの間で様々な葛藤があったという話は印象的であった。やがて全国美術館会議によって文化財レスキュー部隊が組織されるようになると、その一員として派遣され、そこで行った作品の保全処置についても述べられた。田中氏の講演から、震災直後はたとえ被災地域でなくても多かれ少なかれ混乱状態になるが、その混乱状態からいかに素早く組織的な連携による活動へと展開していくかが重要であると、あらためて強く認識させられた。

東日本大震災後、被災救援委員会の本部事務局を東京文化財研究所が担う一方で、西日本に設置されている同組織である奈良文化財研究所が、実質的な救援活動の多くの部分に携わった。その奈良文化財研究所の山崎健氏からは、作品を危険な場所から避難させ、作品の状態悪化を防ぐような様々な処置が講じられた現場の活動が詳細に述べられた。しかしレスキュー活動は単に作品や資料を安全な状態へと処置するだけではなく、避難した膨大な作品、資料をその後保管する場所を確保したり、引き続き活動を支える資金を調達するなど、レスキュー後に生じる多くの課題をも事前に考慮しておく必要性が語られた。

文化財レスキューの主だった活動は新聞やニュースなどで取り上げられたこともあり、その活動の表側については注目が集まりやすい。しかし、この活動がどのように組織され、どうすれば機能するのか、そしてレスキュー活動が実行されるまでの裏側（事務局）の労力にまで、関心を寄せたり、その実情を知る機会はまれである。文化財レスキューの事務局長をつとめられた岡田健氏はそうした事務局の運営について語られ、同じ文化財に携わる者として、参加者からはその想像を絶する多大な労力への慰労の感想が講演後に多く寄せられた。そして岡田氏の講演の中で何より重要であったのは、文化財レスキューがどのような組織であるのかという最も基本的な事項を説明していただいた点にある。災害時に博物館が単独でレスキューの要望を文化庁に出すことはできず、必ず教育委員会から救援を申請しなければならない。

これまで当協会でも何度か研修会を開いてきたように、個々の博物館が災害時に備えて対策を講じることは重要であるが、一方で岡田氏も講演の中で繰り返し強調されていたように、日頃から博物館が教育委員会と共に地域のネットワークを構築しておくことも、災害時の必要不可欠な備えである。このネットワークの構築において当協会が果たすべき役割は大きいだろう。
（森美樹　愛知県美術館）

第36回
東海三県博物館協会研究交流会

東海三県（愛知・岐阜・三重）の博物館関係者が一堂に会して交流を深めるとともに、それぞれの館（園）が抱える課題について事例報告・意見交換を行い、今後の博物館活動の充実・発展に資する目的の研修会が、下記の様に開催された。

日　　時　平成23年10月19日（水）11：00～
会　　場　名古屋市科学館
テ ー マ　「今、なぜ新たな博物館や展示室のリニューアルが必要か」
出席者数　当協会　64名
　　岐　阜　20名
　　三　重　14名　合計98名

厳しい経済状況下にも関わらず、新たな博物館の整備や展示室の全面改装が進行中の博物館・美術館がある。それらの館では“なぜ今”それが必

要だったのか、“今どのようにして”それを成し遂げられ得たのかを報告していただいた。

①愛知県の事例発表
「名古屋市科学館の努め―リニューアルを終えて」
名古屋市科学館館長　石丸典生氏

②三重県の事例発表
「三重県立博物館のリニューアルと課題」
三重県立博物館館長　布谷知夫氏

③岐阜県の事例発表
「岐阜県美術館開館30周年にむけて」
岐阜県美術館館長　古川秀昭氏

平成23年10月20日（木）
愛知県博物館協会加盟館（園）の自由視察
（鈴木雅夫　名古屋市科学館）

愛知県博物館協会
平成23年度第2回理事会の報告

愛知県博物館協会の平成23年度第2回理事会が2月7日（火）、愛知芸術文化センターにおいて開催された。出席者は12名（代理を含む）であった。

平成23年度総会で認められた愛知県博物館協会規約改正について、事務局素案を元に検討を行った。改正案は、平成24年度総会において、審議いただく予定である。

平成23年度部門別研修会の報告
〈教育・普及部門研修会〉

平成23年度教育・普及部門研修会は、平成24年2月14日（火）、愛知芸術文化センター 12階アートスペースEFを会場に開催した。参加者は歴史・美術・自然各分野の方々、総勢34名であった。

研修テーマは、「学校と博物館をつなぐプログラムを考える」とし、学校教育と博物館の連携を図った実際のプログラムを体験し、その手法を学ぶことを目的として開催した。既に、実践的なプログラムを実施しておられる県内の館より3名の講師をお招きし、参加者をプログラムの対象者（小学生）と仮定して実際の事例報告講演をいただいた。

小川裕紀氏（愛知県陶磁資料館学芸員）には、「愛知県陶磁資料館の博学連携事業－館外活動『出前博物館』を中心に－」と題し、2007年から実施されている『出前博物館』鑑賞プログラムとその方法について、ご持参いただいた貴重な作品を鑑賞しながら、ご自身の体験に基づくエピソードを含めたお話を伺った。　学校教員との連携が重要であるという事、ワークシートを用いたり、実際に歴史資料（焼き物）に触れたり鑑賞するなどの体験型授業により、子供たちに焼き物に親しんでもらうところからはじめ、最終的には美を感じる力と歴史的に物事を考える力を養い、博物館教育とその深化を図るとのことであった。

（写真）愛知県陶磁資料館　小川裕紀氏

次に、長谷川道明氏（豊橋市自然史博物館学芸専門員）には、「昆虫のからだとつくり」と題し、豊橋市内の小中学校の授業・部活動・教員等への研修会を対象とした出前授業「自然史教室」の概要を、また資料標本（化石・昆虫等）セットを授業、研修会の一助とすべく貸出をしていることなど紹介いただいた。

（写真）豊橋市自然史博物館　長谷川道明氏

更に今回、長谷川氏のお取計らいによりクマゼミの脱殻と昆虫分解標本セットを使用して、実際に各人が標本を製作させていただいた。参加者一同童心に返りつつ一心不乱に取り組んだ次第である。

最後に塩津青夏氏（愛知県美術館学芸員）には、「愛知県美術館の鑑賞プログラム－学校教員との連携を通じて－」と題し、学芸員・教員・大学生とのワーキンググループを設け、子供・教員向けの鑑賞プログラムを作成実施しているということであった。

（写真）愛知県美術館　塩津青夏氏

その後、実際に展示室内にて小学生向けプログラムの一端を体験させていただいた。ペアを組んでの鑑賞やゲーム的な鑑賞方法をとるなど、作品に興味と親しみをもたせる為の手法一つにも様々な工夫が成されており、大変興味深い内容であった。

今回の研修会では、各講師への質問も多く、日程に余裕が無くなる程皆熱心で、充実した研修会になった。講師の皆様並びに会場を提供くださった愛知県美術館、そして参加者の皆様へお礼申し上げます。最後に、本研修中何となく自分が小学生に戻ったように感じたのは私だけではないはずである。

（奥山哲也　熱田神宮宝物館）

〈保存・修復部門研修会〉

平成24年2月22日（水）、愛知芸術文化センターにおいて、「文化財IPMと文化財IPMコーディネータ」をテーマに保存・修復部門研修会を開催した。講演会には65名が参加し、そのうち九州国立博物館など県外からの参加者は19名を数えた。

文化財IPMとは、展示室・収蔵庫など資料のある場所で被害を生じるレベル以下に害虫数を減少させ、カビ等の目に見える被害の防除を目指すものである。

文化財虫害研究所理事長の三浦定俊氏の講演に先立ち、中部資材株式会社、イカリ消毒株式会社、愛知県美術館、愛知県陶磁資料館が薬剤を使わない殺菌方法について、各ブースに分かれて紹介した。薬剤を使わない殺菌方法として、以下5つのものが紹介された。

①二酸化炭素による殺虫処理
②低温による殺虫処理
③窒素ガスによる殺虫処理
④マイクロ波による殺虫処理
⑤太陽光による殺虫処理

どの殺虫方法も非常に興味深いものであり、参加者からは多くの質問が出ていた。

三浦氏の講演では、文化財保存を「回避」「遮断」「発見」「対処」「復帰」という各ステップに分けて考え、一連の過程における作業の質を上げることの重要性を述べられた。例えば、「回避」「遮断」にあたる清掃を、ただきれいにする行為と捉えるのではなく、そのゴミがどこに落ちていて、どこから発生したものかという原因を取り除くことを重視し、分からなければ日常的に観察・調査を継続することが大切である。そして、このようなIPM活動を円滑に進めるためには、IPMコーディネーターの存在が重要であるとのことであった。このIPMコーディネーター資格の取得は、文化財保存に携わる人たちにとっては、それぞれに違う

（写真）
文化財虫害研究所理事長　三浦定俊氏の講演会

意味で有益である。博物館職員にとっては、よりよい保存環境を実現するための知識とアイデアを持つことができる。また生物被害防除会社にとっては、博物館業務の目的、特徴を理解することができる。そして、ボランティア等業務支援者にとっては、博物館職員がより安心して重要な担当を任せられる存在になれる利点があることを示され、新たな雇用の創出につながるのではという展望を述べられた。

最後に御多忙の中、講師を快諾していただいた三浦氏、ならびに殺虫方法の模擬実演をしていただいた関係各位に深く感謝申し上げます。

（神谷一平　豊田市郷土資料館）

（写真）薬剤を使用しない殺虫方法の模擬実演

〈調査・研究部門研修会〉

23年度の調査･研究部門研修会は「収蔵資料のデータベース化について」をテーマに3名の講師をお招きし、2月23日愛知芸術文化センターで実施した。収蔵品管理、あるいはそのデータベース化といえば、いずれの館にも共通する課題とあって大規模館から小規模館まで、その分野も歴史系、美術系、民俗系など多様な立場の聴講者（37館43名）が集まった。

講演会では、長年にわたって博物館向けの収蔵品管理システムを手がける早稲田システム開発株式会社の内田剛史氏（代表取締役）に、データベースについて様々お話しいただいた。

博物館のデータベースも、いまやインターネットを通じて遠隔地のサーバにアクセスし、アプリケーションを利用するクラウド型システムであり、このシステムのメリットとしては、データの集中管理と共同利用、つまり手元でのサーバ管理が不要、しかもそれによるシステム導入や運用コストの大幅な削減が可能ということであった。具体的なソフトの紹介では自社のI.B.MUSEUM SaaS（サース）を用いて解説、これは単なる管理台帳にとどまらず、ホームページの開設などもこなす優れもの、さすがに博物館業務支援サービスと銘打っているだけのことはあると感じられた。その影には同社が、およそ何百という博物館を回り、現場の学芸員にそれぞれの実情を聞いて、ソフトを作成されたことがあり、使用する側の実情を良くとらえていると感じられた。また話の節々に「そうそう」と共感できることも多く、講演はソフト開発の苦労話ではなく、学芸員の職場環境など博物館業務改善のために、日々努力されている様子がうかがえる有意義なものであった。（I.B.MUSEUM SaaSについて詳しくは、早稲田システムのHPをご覧ください。）

（写真）早稲田システム開発株式会社
代表取締役　内田剛史氏

次に、現場での活用事例をトヨタ博物館の学芸員藤井麻希氏に報告をいただいた。同館において、システム導入までの流れの中で、実際の運用で生じた問題点、あるいはデータベース化の利点を中心にお話しいただいた。同館で使用するデータベースソフトは、操作性、価格、汎用性を顧慮し早稲田システムのものを採用、その後同社のエンジニアとともにプログラムを製造し導入へ。導入後に気付いたことは、出来上がったシステムを業務に結びつけるよう「人」を巻き込むこと、情報を共有するためにも、その蓄積方法を整えてゆくこと

（写真）トヨタ博物館　藤井麻希氏

に苦労されているということであった。ちなみにデータベース化による効率性では、資料検索に割いた時間、資料作りに割いた時間など、実際にシステムを活用して短縮された時間を人件費にあてると年間およそ150万円とされ、業務改善に大きな成果を出していることも良く理解できた。

最後は、安城市歴史博物館学芸員の三島一信氏に同館におけるデジタルアーカイブ構築について報告いただいた。現在システムを構築中である同館、その基本方針として外部よりも内部の利用を主に、職員の資料管理はじめ研究を第1義とし、なにより職員が職務で知りえた情報を共有し、後世に伝え残すためのツールとなるように、こころがけているということであった。同館では、館蔵資料のほか市史編さん事業の調査資料、企画展示で使用した写真、論文、さらには市の広報で取り集めた写真なども含めて資料の一元管理を目指す大プロジェクトであり、データベース作成にかなりの労力をかけている様子がうかがえた。こうした作業を進めることで、将来に亘る効率的な資料管理はもちろん、情報の蓄積、共有による研究の進展、あるいは新たな資料の活用方法などの可能性を感じさせる報告であった。

今回はシステムの開発者、システムの活用事例、構築といった三様の報告を聞くことができた。本研修を通して業務の改善あるいは見直しのためにデータベース化を改めて考えるきっかけに、あるいは具体的にシステム構築の参考になることがあれば幸いである。最後になりますが、快く講師をお引き受けくださいました三氏に厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

（近藤博　あま市美和歴史民俗資料館）

表紙館のご紹介

■岩田洗心館

【開館時間】
水－金　10：00 ～ 16：00
土･日･祝　10：00 ～ 18：00

【休館日】
月・火、展示替期間、夏季、年末年始

【入館料】
高校生以上500円　中学生以下無料

【所在地】
〒484-0081
愛知県犬山市犬山富士見町26番地
TEL：0568-61-2106
URL：http://www.iwatasenshinkan.jp

【駐車場】
４台（内１台障害者専用）

【交通手段】
・名鉄犬山線
犬山駅下車、西口より徒歩２分
・名神高速道路
小牧ICより、国道41号線経由25分

岩田洗心館　書斎カフェ

「愛知の博物館」 No. 95
発　行　日　平成24年3月31日
編 集･発 行　愛知県博物館協会
〒461-8525
名古屋市東区東桜 1-13-2　愛知県美術館内
TEL〈052〉971-5511　FAX〈052〉971-5604